

顕現しがたいものの顕現化をめぐる

陶久明日香（学習院大学）

上田圭委子氏の著書『ハイデガーにおける存在と神の問題』を手にとった者はみな、まずその内容の豊かさに圧倒されるに違いない。507 頁におよぶ本書は、少なくとも近年日本で出版されたハイデガー関係の博士論文の規模をはるかに超えている。本書はハイデガーの存在の思索と神との関係についての解釈を主軸としつつ、彼の思索をその最初期から究明し、20 年代の『存在と時間』を中心とする現象学的存在論に至るまでの思想形成、そして形而上学期を経て『哲学への寄与』を中心とする 30 年代の「存在の歴史的思索」、さらに 40 年代の『ヒューマニズム書簡』を中心とした中期以降の展開に至るまでの過程を事細かに検討している。とはいえたんに時系列にしたがって一つずつテキストを吟味するだけの構成になっているのではないのも本書の特徴である。本書は『存在と時間』、『哲学への寄与』、『ヒューマニズム書簡』を第二部でとくに集中的に取り上げるが、そこでは「存在」、「存在の真理」、「現存在」という事象区分を優先して三つのテキストの内実を吟味しており、また序章、第一部、そして第三部でも、特定の事象の解釈をする際の必要に応じて随時この三つのテキストの内容に触れるという手法をとっている。一見するとかなり複雑な構成になっているが、おそらく上田氏にとってはこの三つのテキストと上記の三つの事象こそが存在の思索と神との関係という主題を考える上で主軸になるもので、この主軸にそれを支えている様々な事象、またそれらについての様々な他のテキストの解釈を巻きつけることにより、ハイデガーの思索の奥深さを提示することを試みたのではないかと思われる。さらに全集版の未邦訳の文献についてもかなりの情報が得られるため事典的な要素も備えており、今後のハイデガー研究における必読書となることは間違いない。「神の問題はハイデガーの思索にとって一つの周辺的な問題ではなく、むしろ根幹に関わる問題」（上田 4）であることを綿密なテキスト読解によって示そうとした上田氏の真摯な研究姿勢に感銘を受けたのは一人、評者だけではないだろう。ただ、いくつか消化しにくい解釈も見受けられる。以下では、評者が素朴に違和感を覚えた箇所を中心にいくつか質問させていただきたい（ハイデガーの術語に関しては、基本的に上田氏の訳を採用する）。

1. 顕現しがたいものについての論じ方

まず伺ってみたいのは、存在や神といった、通常のもののようには顕現しがたいものを論じることについてである。序章第5節「フッサール『論理学研究』と現象学的方法の存在への問いの方法としての摂取」において、上田氏はハイデガーがフッサールの影響のもと、現象学を存在へと問いを仕上げ、遂行する際の方法として確立したということを述べている。『存在と時間』の第7節で論じられるハイデガーの「存在」の現象学は、フッサールの「意識」の現象学とはたしかに異なる。しかし現存在には「存在了解」が具わっているとするハイデガーの見解は、「フッサールが、人間には、イデア的統一体としての意味をそれ自体として範疇的直観によって直観しようとしたその基本的な現象学の見方を、受け継いだものと考えられる」（上田 70）と氏は解釈する。またこのことを「それ自体としての存在が現象として自らを与えてくるときに、人間は、それに接しようものであるという、現象学的見方の共通の前提が受け継がれていたと考えられるのである」（同上）とも表現している。そして氏によるとこの見方は『存在と時間』のみならず、すでに 1920/21 年の『宗教現象学入門』講義で導入されていた解明の方法としての現象学、つまり神として経験されたものの内容（内容意味）、それが経験されるその仕方としての関わり方（関係意味）、その神との関係が生のうちでいかに遂行されたのかというその遂行の仕方（遂行意味）を問うことの理論的基礎になっていたという（上田 69 頁参照）。

しかし第10章第3節『哲学への寄与』における「最後の神」とはなにか」において、この現象学という手法がもはや神について何かを述べる際に適切ではないことがフィガルやコリアンドーの研究も参照しつつ注において述べられている。

既に私たちが第一部でパウロ解釈およびアウグスティヌス解釈に即して見たように、初期フライブルク期のハイデガーは現象学的な探求においては、神そのものが何であるのかではなく、神と関わる人間の事実的な生のあり方の「いかに」を露わにすることを課題としていた。〔.....〕確かに、ここ『哲学への寄与』では、初期フライブルク期と比べて、より明確な形で、ハイデガーにおける奥深い存在と神と現存在の三者のあいだの関係が思索されているとはいえ、どちらにおいても、ハイデガーの存在の思索にとって、中心的であるのは、神と人間との関係という現象そのものの内容意味、関係意味、遂行意味、の統一としての形式的告示であって、その一方の項であり、人間にとっては本来、把握しきれないもの、自由になるものではないところの神がどのようなものであるのかは、現象学に基づく存在の思索においては、明らかにされえないし、また何か言い述べられることはそもそも正しいことではない、と言えよう。（上田 454、注 488、下線部は評者による）

そして「神々を超える聖なるものをはるかに見上げつつ、そこから発出してくる神について語ることができる」（同上）のが詩人であるとし、第11章においてヘルダーリンの詩作において「聖なるもの」として捉えられた自然は「ハイデガーの存在の思索における「奥深い存

在」と同じものを、〔ヘルダーリンが〕詩人の観点からうたったものであると考えられる」（上田 461）という解釈を提示する。

たしかにハイデガー自身、聖なるものについての経験を語ることを詩人の使命と認めているし、聖なるものの記述に関しては彼が主にヘルダーリンの詩作をその解釈学的背景としていることには評者としても異論はない。ただ、引用における「人間にとっては本来、把握しきれないもの、自由になるものではない」ということは、上記のように「聖なるもの」と「奥深い存在」が同じなのであれば、神のみならず「奥深い存在」にも当てはまるはずである。彼の存在の思索では「聖なるもの」の内実について何も語れないのだとすると、「奥深い存在」についても何らかの内実らしきことを言い述べることはできないということになるのではないか。

実際、「奥深い存在」に関しても、ハイデガー自身が自分の経験だけを拠り所にするのではその内実らしきことを言い述べることは不可能である。それが原初においてピュシスとしてのアレーテイア（非秘匿性）として経験されたが、自らを隠している事象である以上、原初から離れ落ちてしまった現代では「奥深い存在」の直接の経験はほとんどできないとさえ言えるであろう。こうした分析を含め、彼の記述を成り立たしめているのはあくまでも、既在の哲学者の言説を存在経験のリアルなドキュメントとみなし、それを解体しつつ解釈するという手法である。つまり神や聖なるものの論述においてヘルダーリンを頼りにしたように、「奥深い存在」に関しても哲学者たちのリアルなドキュメントを頼りにせざるを得ない。しかしこの試みは「奥深い存在」と関わる彼らの生のあり方の「いかに」（ex. タウマゼイン）だけを取り出すにとどまらず、この「いかに」に関わる彼らの言説から「奥深い存在」の内実らしきものを汲み取り、何とか言語化する試みであろう（隠れと現れ、退去、自己隠蔽など）。それは彼がヘルダーリン解釈を通じて、神と関わる詩人の事実的な生のあり方の「いかに」（ex. 喜び、聖なる悲しみ）と、その言葉から「聖なるもの」の内実らしきものを汲み取ろうとする試みと合致する。

たしかに『哲学への寄与』においてはヘルダーリンについての記述はあるものの、その詩の詳しい解明は講義録や講演において展開されているため『哲学への寄与』においては形式的告知的な論述で留まり、その内実には迫れていないのかもしれない。とはいえ事情は「奥深い存在」に関わる他の哲学者たちの論述にも当てはまるであろう。つまり評者の抱く違和感とは、ハイデガーの「現象学に基づく存在の思索」は「奥深い存在」を論じられても、「聖なるもの」の内実を述べられないとする見解である。事象の直接経験の記述を事象の内実についての語りとするのであれば、ハイデガーの存在の思索はおそらく「奥深い存在」の内実についてもほとんど語ってはいないであろうし、逆に既在のドキュメントを補助とするのであれば、いずれの事象についても、それに関わる生の「いかに」に留まるだけでなく、それにまつわる言説を基にして、事象の内実を何かしら言葉にすることはできるのではないか。

<別の視点から>

またこの際上田氏が参照しているフィガルやコリアンドーの言うように、「現象学に基づく存在の思索」は「奥深い存在」を論じられても、「聖なるもの」の内実を述べられないということが仮にあたっていたとしても、それは必ずしも彼らが示唆するような、存在の思索の不十分さということにはならないようにも思われる。基本的にかなり「ドイツ」色の強い「神」についてのヘルダーリンの論述に出てくる「故郷」を、ハイデガーは上田氏が正しく指摘しているように、「存在への近さ」などと言い換えることにより、普遍化を試みている（上田 463, 注 500）。それは形式的告知的性格を備えた思索によって可能になると解釈することもできるかもしれない。

2. Existenz としての現存在と Element としての存在

次に伺ってみたいのが、顕現しがたいものが顕現化する場合の、現存在の有り方についてである。第 8 章第 4 節で上田氏は次のように述べている。

『哲学への寄与』の真理の構造からすれば、奥深い存在はそれ自体としては人間に対して直接に現れてくるものとは考えられておらず、存在は、形而上学においては存在者の側から見た存在が、イデア、絶対精神、同じものの永遠回帰などとして *Anwesen* してきたと考えられていた。このように、既に存在自体が感性を超えたところで捉えられとされていることからすれば、奥深い存在の呼び求める促しの働きが存在として露わとなることなしに人間に直接に *Anwesen* してくるとは考えられず、奥深い存在の働きがまず超感性的な領域において存在として顕在化し、その顕在化した存在が超感性的な領域においてその領域へと出で立った〔エク-システンツとしての〕人間に対して露わとなるという、こうした双方向の働きの一致がハイデガーの存在の真理の基本構造からは、考えられるように思われるのである。（上田 379 以下、下線部は評者による）

たしかに奥深い存在の呼びかけが顕現するとしても、それが一方的に人間に到来するだけでは、聞き逃されてしまう可能性はつねにあり、人間がある程度自覚的にその呼び声に聴従するという仕方で態度を合わせるという意味で、双方向の働きが必要であるということは確かであると評者も考える。ただこの論述によると、人間と奥深い存在がそれぞれ独立しており、両者の間にそれを媒介する超感性的な領域があり、それぞれがそこに立ち現れることにより両者の邂逅が生起するというようなイメージができてしまうのではないかと思った。

評者としてはこのイメージは受け入れにくい。上田氏が正しく述べているように、ハイデガーの論述に基づくなら、（前期思索において「超越」が現存在の存在了解の動きとしてつ

ねに働いていたのと同様）人間はエクシステンツという有り方をつねにすではいるのであり「根源的には、こうした存在の真理の領域において、私たちは、そのつどの日常の生を生きているということが言えるであろう」（上田 437）。そうでなければ、そもそも人間として、意義連関の世界の中で存在するというあり方そのものが不可能である（同上）。上田氏が上記の引用で考えている人間の有り方は、おそらく日常の存在忘却のあり方から変容し、存在の「可能にする」働きにより、またこの働きと関係しているからこそ自身が成り立っていることを「ことさらに」引き受けることかと思われるが（上田 391 参照）、それを超感性的な領域に出で立つという言い方をしてしまうと、存在の真理の領域自体がわざわざ入っていかねばならない特別な場のようなものになってしまうのではないか。

これと連関して気になったのは第 7 章第 4 節で論究される Element の訳語である。本書では渡邊二郎訳の Element の訳である「境域」が採用されている¹。そしてこの Element は「何かが本来的に存在できるようにするもの」、「成就させる」もの、そうした意味での「能力 (Vermögen)」であることが示される。上田氏が指摘しているように、ハイデガー自身、この Element としての存在について、それが「思索の技術的な解釈の内では放棄されてしまっている」（上田 338）というように、何かそれ自体で独立してあるイメージを抱かせる表現をしている。また本書第 12 章第 2 節「ハイデガーの存在の思索と根源的倫理」において上田氏が注目する『ヘルダーリンの賛歌 「イスター」』（1942 年夏学期講義）の『アンティゴネー』解釈でも、「人間はある意味、そのうちであらゆる存在者が何らかの存在者である当のものの、つまり存在の外部にある」（GA 53, 93、下線は評者による）ということが述べられており、その根拠として、人間のみが存在者へと関わることができ、またそれゆえに存在を忘却することにもなるということが挙げられている (vgl. ebd.)。しかしこうした表現が示しているのは、「ある意味」人間は外部に在ると言えるかもしれないということ、つまり物理的に存在の外部にあるというのではなく、むしろそれは存在を忘却していることを意味するということである。

「倫理 (Ethik)」がギリシャ語のエートスに由来し、しかも「人間の居場所をよく考えること」（上田 481, GA 9, 356）を意味し、またそれが同時に「人間の元初的な Element としての存在の真理を思索する」(ebd.) ことなのであれば、さらにハイデガーにおいてはつねに存在は「現 (Da)」として考えられているのであれば、存在を表す Element という語を場所的な意味を見出しつつ解釈するということに関しては同意する。ただその場合、可能にする力という内容も加味すると「境域」というような区切られた場をイメージさせる語よりは「本領」などの訳のほうが適切なのではないか。“Er ist in seinem Element.”と言う場合、それは「彼は水を得た魚のようだ」とか「彼ははつらつとしている」などということを意味している。つまり何かが本領発揮、つまりそれ自身がもともと備えている力を発揮できているという意味であり、「何かを可能にするということがここで意味するのは、何かをその本質

¹ 辻村公一訳（ハイデッガー全集第 9 巻『道標』所収、東京大学出版会、2021 年）では「在り処」、桑木務訳（『ヒューマニズムについて』、角川文庫、1958 年）では「要素」。

（Wesen）において守ること、何かをその Element のうちで（in seinem Element）引き留めておくこと」（GA9, 317）という『ヒューマニズム書簡』での主張とも合致するように思われる。そして、この我々を含め、様々なものの「本領」を発揮させる当の「本領」という場²としての存在の内に我々はいるが、この場がそれとしては忘れられてしまっているとするなら、その力自身が本領発揮してはおらず、ひいては様々なものもそれぞれの素質を開花させられない状態（例えば現代技術における自然の素材化、画一化など）になっているということであろう。つまりこのように Element という語には可能にする場としての存在とそれにおいて可能になるものとの必然的かつ有機的な共属関係が含まれていると思われるため、「超感性的な領域」ないし「境域」としての存在へという概念を導入するのは少々難しい気がした。

またハイデガーのいう根源的倫理を体現している人物として上田氏に取り上げているアンティゴネーのあり方が果たして超感性的な領域へと出ているのかも疑問の余地があると思われた。アンティゴネーについての上田氏の記述は以下のとおりである。

〔.....〕アンティゴネーは、自らが存在者と関わること自体への執着を放ち、また無と見做すということにおいて *unheimisch* な存在として、人間の本来の故郷である存在の開けた明るみに脱自的に立ち、そこにおいてのみ、聴き取ることのできる神の掟を聴き取り、ただ兄の生の尊厳を守り、大切にしようという存在の呼び声に従って徴としての埋葬を行う。（上田 499）

おそらくアンティゴネーが「自らが存在者と関わること自体への執着を放ち、また無と見做す」というところに上田氏は「超感性的」という要素を見出しているように思われるが、そこで生じている *unheimisch*、つまり馴染みなさというものは、諸々の存在者と関わる日常からのズレに伴う居心地の悪さであり、上田氏自身が指摘しているように、あくまでも「存在者の中にあって *Unheimisch*」である（上田 498）。この居心地の悪さの感覚はやはり感性的なもの（ここでは個別のものではなく、おそらく全体として）との何らかの（積極的というよりはむしろ欠損的な）関わりにおいてしか生じないものであり、この感覚自体、感性的、ハイデガー的に言うなら情態的なものであるといえるのではないか。

3. 根源的倫理の実現について

最後に伺いたいのは、根源的倫理の実現についてである。先述のとおり、上田氏は第 12

² DUDEN- Das Große Wörterbuch der deutschen Sprache in 8 Bänden, Band 2 における Element の説明を参照：
3. <o. Pl.>[idealer] Lebensraum; Umstände, in denen sich ein Individuum [am besten] entfalten kann: hier fühlt er sich, ist er in seinem E. (S. 893)

章においてハイデガーの思索における根源的倫理について洞察している。そこではハイデガーのヘラクレイトス解釈をもとに、ダイモーンが「慣れ親しんでいないもの（das Ungeheuer）」としての「神」であることが示され（上田 486）、またこうしたダイモーンの人間への顕現は「存在が現存在に対して露わになってくる存在の真理の領域において生じることとされている」（上田 489）という解釈を打ち出す。また上田氏はこの存在の真理を尋常ならざるピュシスとしての存在の顕現とし、これを神々の現存と結びつけて考えている（上田 494）。そして先に紹介したアンティゴネーにおける根源的倫理の検討を経て、「すべての存在者の立ち現われとその本質の展開を可能化している愛とも恵みとも呼ぶべき神的-ピュシス的な存在からくる定め」（上田 501）に従う様々な人を、「根源的な意味で倫理的に行なった人間」（500）と上田氏は呼んでいる。そこではガンジーなど歴史上の人物のみならず、この世の執着を捨て去り他者の存在の展開に奉仕する修道者、命がけで出産や子育てをする母親、打算なく子どもの一人ひとりの本性を見守り育てる教育者、心をこめて人々を介護する人、故郷の島や海を守るためにデモ活動をする人など、多様な例が挙げられている。

たしかにこのような解釈は魅力的であり、秘教的にも思われがちなハイデガーの 30 年代以降の思想をできるだけ秘教化させず、そこに現代的な意味を積極的に見出すという姿勢にはとても好感が持てた。ただハイデガーに即して考える場合、この実現はそもそも現代において真の意味で可能なのか。30 年代以降の思想で特徴的なのは、人間の側による「存在忘却」だけでなく、存在によって見捨てられていることとしての、存在の側による「存在棄却（Seinsverlassenheit）」についての言及であろう。『存在と時間』を中心とする前期思想であれば、ハイデガーは各々が自分の代替不可能な関係を持たない、もはや世界内存在することが不可能になる可能性としての死を、言い換えれば自身の存在にいやでも属している隠れの不気味さから逃げずに留まる、良心の呼び声を聴くという仕方の内に、世人による存在忘却に対するある種の打開策を見出していた。

しかし、『哲学への寄与』を中心とする存在の歴史的思索においては、古代ギリシャにおける原初的思索の究明に基づき、上記のような「存在棄却」について語られだす。古代から生じていた「存在棄却」は、「我々の〔すなわち現在の西洋における〕困窮（Not）」（GA 45, 189）であり、今や全世界規模に広がる荒廃化の根拠として、あらゆるものが本質的に開花することをその根っこから窒息させている（vgl. GA 77, 211）³。しかもこの「困窮は困窮としては経験されない」（GA 79, 55, vgl. auch GA 65, 123）⁴。このような状態で、ハイデガーが意図しているとされる、人々が聴従帰属すべき原初の神的-ピュシス的な奥深い存在の呼び声は果たして顕現するのか。ピュシスの痕跡を残す「聖なるもの」の隠れた挨拶をそれとして、隠れを隠れとして言葉の中で保護し、それを伝える媒介者としての詩人の存在は必要なのか、それとも否か。

³ 拙論「困窮の是認と同等化の行方 —存在の歴史における根本気分についての一考察—」、『Heidegger-Forum』第 8 号、2014 年、8 頁。

⁴ 同書、9 頁。

凡例

Heidegger, Martin

GA 9: *Wegmarken*, Gesamtausgabe, Bd.9, Vittorio Klostermann, 1976

GA 45: *Grundfragen der Philosophie. Ausgewählte »Probleme« der »Logik«*, Gesamtausgabe, Bd. 45, Vittorio Klostermann, ²1992

GA 53: *Hölderlins Hymne »Der Ister«*, Gesamtausgabe, Bd. 53, Vittorio Klostermann, ²1993

GA 65: *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis)*, Gesamtausgabe, Bd. 65, Vittorio Klostermann, ²1994

GA 77: *Feldweg-Gespräche*, Gesamtausgabe, Bd. 77, Vittorio Klostermann, 1995

GA 79: *Bremer und Freiburger Vorträge*, Gesamtausgabe, Bd. 79, Vittorio Klostermann, 1994

Asuka SUEHISA

Die Frage nach der Erscheinung des Unscheinbaren